



大阪府立北野高等学校図書館

第4号

2013.10.1 発行

秋風が心地よく感じられる季節になりました。読書の秋、到来です。What is your favorite book? 問題集、単語集です…と答えそうになった人はいませんか?? 図書館は、知の宝庫だと感じます。普段あまり本を読まない人も、この機会に一度図書館を訪れてみてはいかがでしょうか。

本の後ろにある【 】内の記号は図書館での請求番号です。

*読書の秋…の前に、芸術の秋ということで、まず次の2冊を紹介します。

①豊竹咲大夫・尾嵯彰廣「近松門左衛門名作文楽考① 女殺油地獄」(講談社)
【912/T6/1-1】【912/T6/1-2】

②豊竹咲大夫・尾嵯彰廣「近松門左衛門名作文楽考② 心中天網島」(講談社)
【912/T6/2】

大阪で生まれ育った文楽を鑑賞したことはありますか? 文楽は、台本(詞章)である「浄瑠璃」とそれを語る「義太夫節」と、芝居である「人形芝居」が合体した芸能です。「文芸」「音楽」「演劇」という芸術要素の総合と言えるでしょう。この三位一体の芸術をなんと!! DVDで鑑賞することが出来ます。公演DVDと演者と研究者による鑑賞ガイドがセットになっており、日本芸能初心者の私でも楽しい時を過ごすことが出来ましたよ。特に、文楽の音の世界を作り出す太夫と三味線の掛け合いが新鮮でした。太夫とは浄瑠璃を語る人のことで、様々な人物になりきって人間性や心理状態を独特の語り口で表現します。登場人物だけでなく、季節や時間、風景の描写、劇の進行や状況の説明なども一人の太夫が様々な発声や息づかいで語っています。三味線は、太夫が表現しようとしている登場人物の感情やその場の情景描写を補い、また場合によっては太夫をリードする役目も果たしています。日頃あまり耳にすることのない独特の響きの中に、どこか馴染みのある関西なまりが感じられるのも魅力です。グローバル化が進み、海外の文化に目が向けられることが多いですが、意外と身近な文化を知らないことが多いです。時には、ローカルな文化を嗜む時間があってもいいかもしれませんね。

*それでは、読書の秋に向けて、何冊か本を紹介したいと思います。今回のテーマは、人間一人ひとりの持つ「能力」&「脳力」です。

③市川伸一「勉強法の科学 心理学から学習を探る」【408/14/1-211】

テスト前に紹介してよ～と言われそうなタイトルですね。いくら勉強してもなかなか結果に結びつかないのはどうしてかなあ～努力が足りないから??頭が悪いから??…そんな風に悩んでいる人に必見★あなたに合っていない勉強法をしているだけかもしれないよ。何かを記憶するとき、理解するときには私たちの中で何が起きているのでしょうか?

例えば、“数学の問題を解く”には、複雑な過程を経ています。問題が解けない場合、その過程の中で乗り越えられない壁があるのです。その壁は人によって異なりますので、友達と同じ勉強法を実践してもダメですよ。問題が解けない理由が分かれば、その部分をクリアするための勉強法が見つかるのではないのでしょうか。

更に、勉強する気が起きないなあ～と感じている人の為に、やる気が出る/出ない仕組みまで解説されています。やる気が起きる+自分に合った勉強法を発見する→楽しく効果的に勉強できる…いいこと尽くしですね。

④理化学研究所脳科学総合研究センター編「脳科学の教科書 ころ編」(岩波ジュニア新書)【491/R4/2】

「からだ」には様々な臓器がありますが、その中で「脳」という臓器は、外界を知覚し、判断し、それに基づいて行動する働きを担っています。こうした脳の働きの主観的な体験が「ころ」ということになります。ころは物質ではなく、脳の働きのことを意味しているのです。この本では、脳のどの部分でどの様な感情が生み出されるのか?ヒトに特有の抽象世界を作り出すことばは、どこで生み出されるのか?について、更に、脳機能を調べる手段としての画像法、神経疾患・精神疾患と脳との関わりについて解説されています。

脳の働きであるころは、私たちのからだという枠を超えて、多くの他の人の脳が生み出したころと相互作用しながら、社会という現象を創り上げています。感情をコントロールして冷静に振る舞うことが、大人としての行動でしょうか??情動や感情はそもそも、動物が直面した場合で最適な行動選択する為の規範だったはず。人間とは何か、「自己」とは何か、そして「理」と「情」の調和を、自然科学的視点と人文・社会科学的視点からアプローチした1冊となっています。

⑤高木貞敬「脳を育てる」(岩波新書)【491/T7/1】

生命は天からの授かりものであるという考え方のように、私たちの「脳」もまた授かりものであると考えることが出来ます。授かった以上、私たちの脳には他人に代用できない、また他の人々にはない、自分だけにしかない特別な能力や才能が与えられているとすれば、その様な使命感は、実際私たちに生きがいを与え、生きる喜びを与えてくれます。この本には、大切なことは、自分には必ず何か特別な能力が与えられていると信じて、それに出会うまで、また、それを見出すまで忍耐に忍耐を重ねて、それを発掘し、それが見つければ、ひたすらそれを伸ばしていくという努力を惜しまないことであると書いてあります。自分を他人と比較し、気付いたら優劣をつけていたという経験はありませんか？自分に与えられた特別な才能や技術に目覚めたとき、他の人々に感じていた劣等感はなくなるかもしれませんね。授かった特別な才能を発掘しそれを磨き上げ、それぞれオリジナルな独自の人間となるという生き方にこそ、人は生きがいを感じて幸福となれるのであり、自信をもって堂々と自分の道を歩むことができると筆者は述べています。脳をよくするということは、知性を磨くことを意味しますが、磨かれた知性の輝きは、人を魅力的にするようです。いかなるときも「今が知性を磨く絶好のとき」と前向きに捉えて、広く考え、広く学び、知性を高めていくことって、素敵なことだと思いませんか？

⑥マーク・チャンギージ「ひとの目、驚異の進化」(インターシフト)【141/C1/1】

この本は、人間に備わる視覚的な4つの超人的な能力の正体を解き明かしたものです。4つの能力とは、テレパシー・透視・未来予見・霊読(スピリッド・リーディング)です…と言ったら、非科学的な魔法か心霊現象の本！？と思う人もいるでしょう。これらの能力は、現実の肉体と脳が発揮する力に他ならないのです。科学的な用語で言い換えると、色覚・両眼視・動体視力・物体認識という視覚の主な下位区分に属するものです。

人間の本质にまつわる根本的な疑問に対する答えが、人間の脳の進化と、ある特性が進化した生態学的条件に重点を置きながら述べられています。人間が色覚をもっているのは、肌を見て、敵や味方の感情と状態を感知するため(テレパシー)。目が前向きについているのは、自分の鼻や身の回りの邪魔者の先を見通すため(透視)。目の錯覚は、現在を正しく知覚するために、脳が未来を見ようとしているから(未来予見)。文字が、自然界のものに似た形へと何世紀もかけて文化的に進化したのは、人間は自然を見るのが得意になるように進化してきたからであり、こうした文字のおかげで、人の考えをよることができる。生者だけでなく、死者の考えも(霊読)。

中でも、未来を予見する力については興味深かったですね。視覚系が光を受けてそれを視知覚に転換するのにかかる時間は0.1秒。脳が0.1秒前の過去を処理しているようでは、私たちの日常生活は柱にぶつかりまくり☆目の前の現実と一致しない知覚を構築する脳の働きによって、直線が曲がって見えたり、点が飛び出してくるように見える錯視が起こります。

自然淘汰、或いは、文化的淘汰を通して進化し続ける私たちの超人的な能力。この本を読むと、今まで気づいていなかった世界が見えるようになるかも！？

⑦古屋晋一「ピアニストの脳を科学する」(春秋社)

膨大な数の音符をすべて頭の中に記憶し、それを左右の10本の指を使って正確無比にアウトプットしつつ、聴く人を心の底から感動させるような芸術的な演奏を繰り広げるピアニスト…感性豊かな芸術家であるとともに、高度な身体能力をもったアスリートであり、優れた記憶力、ハイスピードで膨大な情報を緻密に処理できる高度な知性の持ち主と言えるでしょう。考えてみると、実に不思議な能力をもった、世にも稀な存在ですね。超絶技巧の大曲をいともたやすく、華麗に弾きこなすピアニストの脳と身体がどのような働きをしているかについて、様々な実験と調査を駆使して探究した結果が紹介されています。脳や神経、感覚器官や筋肉を常にフル稼働しては、一曲を演奏し終える前に力尽きてしまいます。ピアニストは、脳や身体の省エネ術を身に付けているのです。一見すると相容れない芸術と科学(医学・工学)を融合させた「音楽演奏科学」に興味を持った方は、是非ご一読を。

⑧茂木健一郎「意識とはなにかー〈私〉を生成する脳」(ちくま新書)【491/M13/1】

輝き、香り、響き、甘さ、暖かさ etc. わたしたちの意識は鮮やかな質感(クオリア)に満ちています。物質である脳が、心の中にそうしたユニークな感覚を生み出すのは何故か? 脳と意識の問題を突き詰めていくと、脳機能や神経細胞の活動だけでは説明できない問題、つまり“脳科学”や“認知科学”の範疇を超えた問題に直面せざるを得なくなります。すべてを感じる存在としての〈私〉とは何者なのか? 〈あるもの〉がまさに〈あるもの〉としてあること=同一性はどのように成り立っているのか? ととても観念的で哲学的な問題へと発展します。脳と意識、科学と社会、刺激と反応、客観と主観…対峙するものを脳科学・認知科学・哲学という学問のカテゴリーを超えた新しい視点から考察してあります。“文系”のあなたにも、“理系”のあなたにもお薦めしたい1冊です。